スライド説明会資料

伊勢国分寺跡 (第 40 次)

日時 ; 平成 29 年 6 月 18 日　14:00 ～
場所 ; 鈴鹿市考古博物館講堂

所在地	鈴鹿市国分町字西高木 223 番 1 の一部
調査目的	個人住宅建築に係る埋蔵文化財の記録保存
調査期間	平成 28 年 2 月 19 日～平成 28 年 3 月 26 日
調査面積	135m^2
調査主体	鈴鹿市考古博物館
調査担当	藤原秀樹・田部剛士・太田有香

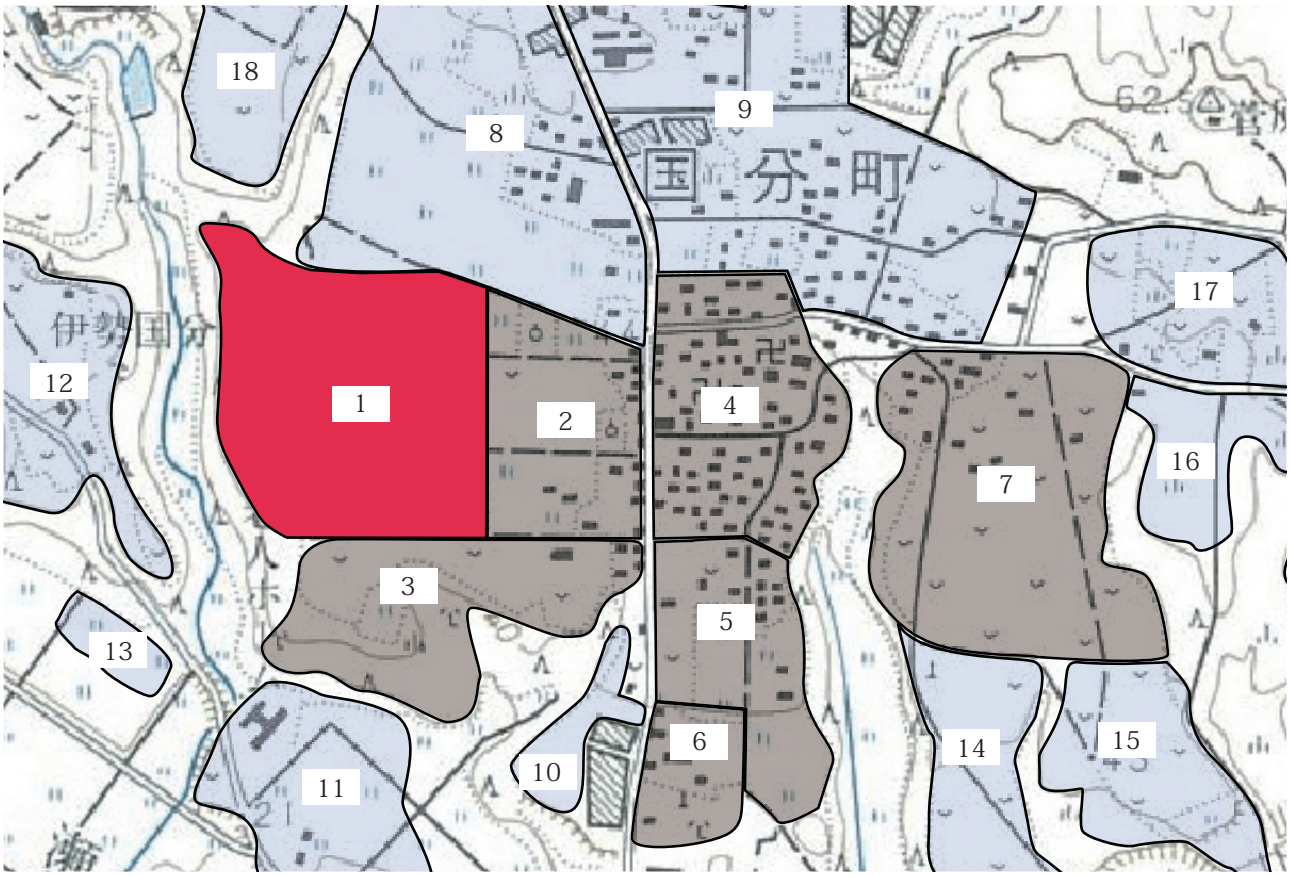

Fig.1 伊勢国分寺跡周辺遺跡略図 (国土地理院 鈴鹿 [北東]1/25000 参照)

1. 伊勢国分寺跡　2. 国分西遺跡　3. 狐塚遺跡　4. 国分遺跡 (推定国分尼寺跡)　5. 国分南遺跡　6. 南浦遺跡
7. 国分東遺跡　8. 国分寺北遺跡　9. 国分北遺跡　10. 念仏山遺跡　11. 間瀬口遺跡　12. 大谷茶山遺跡
13. 蛸田遺跡　14. 沖ノ坂遺跡　15. 中尾山遺跡　16. 境谷遺跡　17. 富士山越遺跡　18. 東植松遺跡

1.　はじめに

伊勢国分寺跡は鈴鹿川左岸の段丘上に位置し、1922 年 10 月 12 日に国史跡に指定されている。東には国分西遺跡、伊勢国分尼寺推定地である国分遺跡があり、南には河曲郡衙関連の遺跡とみられる狐塚遺跡がある。また、周囲には白鳳寺院と推定される南浦遺跡のほか、国分南遺跡、国分東遺跡がある。さらに段丘上には古墳が築造されている。

伊勢国分寺における考古学的な発掘調査は 1988 年から、国・県の補助を得て鈴鹿市教育委員会が主体となり寺域の範囲確認調査として始まる。1990 年度からは併せて国分尼寺推定地の範囲確認調査が行われることとなり、以後史跡内だけでなく国分遺跡、南浦遺跡、国分南遺跡、狐塚遺跡の調査も伊勢国分寺跡関連遺跡として調査次数に含んでいる。今回の調査で 40 次を

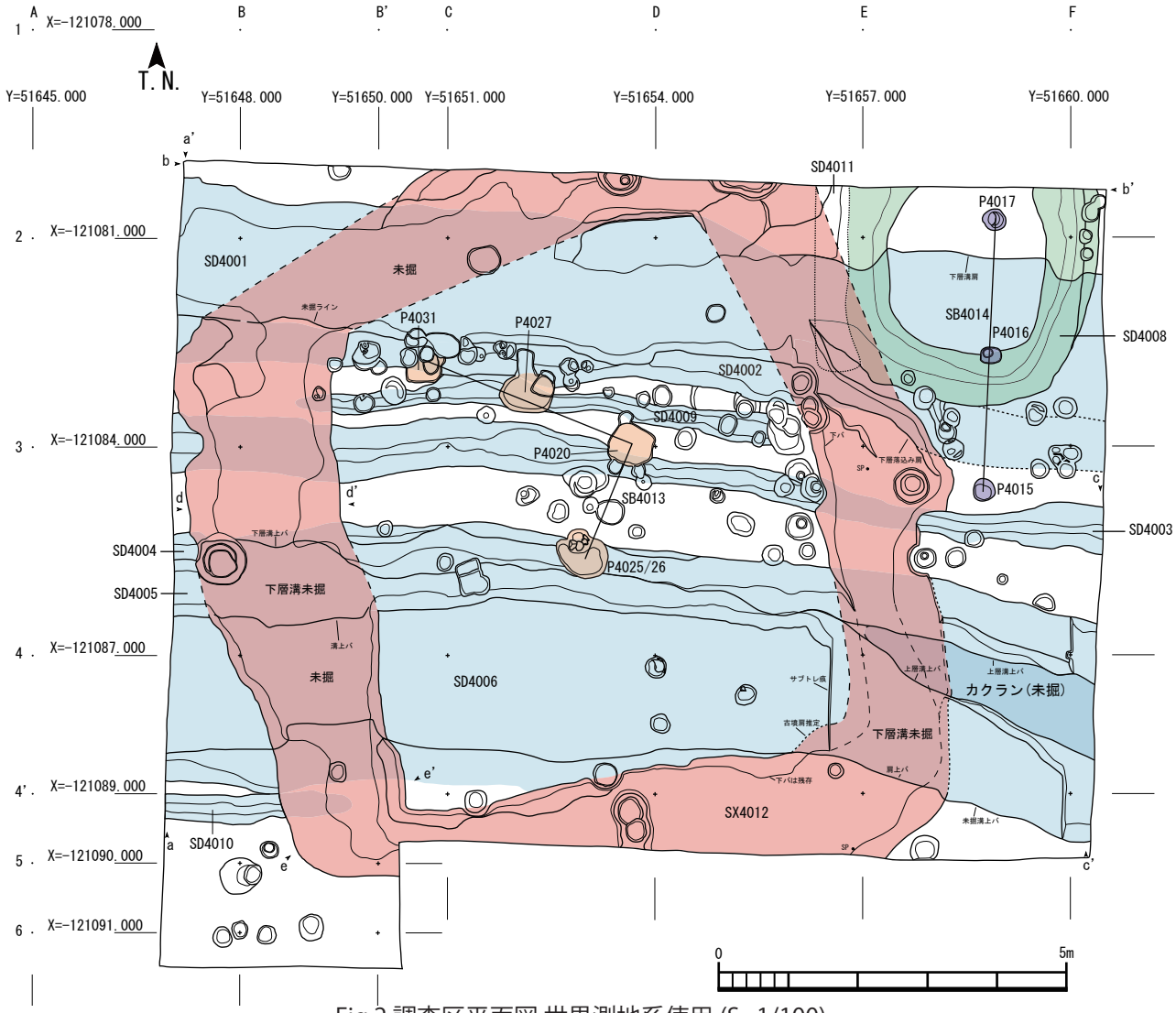

Fig.2 調査区平面図 世界測地系使用 (S=1/100)

数える。

今回の調査は個人住宅の建築に伴い行われた。調査地は伊勢国分寺の伽藍の南東隅から南へ80m 離れた場所で第 7 次調査区と隣接する。第 7 次調査区からは古墳時代後期の方墳、奈良時代頃の掘立柱建物群、奈良時代後期から平安時代にかけての掘立柱建物と竪穴住居、平安時代以降の掘立柱建物が確認された。また、東西に走る鎌倉時代以前に機能していた大溝が検出された。これらのことから、当時確認された溝の続きと掘立柱建物が確認されると予想された。

2. 調査結果

主な遺構として古墳 1 基、溝 6 条、墓または塚と思われる周溝 1 基、掘立柱建物 2 棟、多数のピットが確認された。

なお、遺構を表す記号は以下のとおりであり、それらに調査次数 40 と遺構確認順の通し番号を与え、識別番号としている。

遺構記号；古墳＝ SX　溝＝ SD　掘立柱建物＝ SB　ピット、柱穴＝ P

(1)　古墳

SX4012　1 辺が約 9 m、確認できる最大幅 2.2m、深さ 0.3m の規模をもつ周溝が検出される。方墳で、墳丘主体部は掘立柱建物や道路の敷設に伴い削平されている。溝（SD4001 ～ SD4006）等に混入している遺物の中に 7 世紀代のものが含まれていることから、7 世紀代の

築造と考えられる。

（2） 溝

SD4001　調査区北側で確認した東西に走る幅広い大溝である。最大幅は約 2.2m あり、SD4002 と並行している。SD4002 を壊していることから SD4002 より新しい遺構であり、SD4008 と掘立柱建物 SB4014 に壊されていることから、これらの遺構より古いことがいえる。遺物に灰釉陶器ないしは山茶碗が出土していることから、中世には道路としての機能を持たなくなったと考える。

SD4002　SD4001 の南側で検出した溝で、東西に走っている。SD4001 に壊されていることから SD4001 より古い遺構である。遺物に 7 世紀頃に帰属するものが含まれているが、これは古墳由来の遺物と考える。

SD4003　調査区の中央で確認した東西に走る溝である。この溝はほかの 5 条の溝とは違い、切り合い関係がなく独立しており、遺物が多くまとまって出土した。出土品の大部分は瓦や山茶碗であり、山茶碗が出土していることから中世に埋没したと考える。

SD4004　SD4003 の南側で検出した溝で、東西に走っている。SD4005 と重複するが、SD4004 の方が古い。調査区の中ほどで SD4005 に完全に壊されている。また、遺物は出土していない。

SD4005　SD4004 の南側で検出した東西に走る溝である。SD4004 及び SD4006 と重複するが、SD4004 と SD4006 の方が古い遺構である。遺物に山茶碗が含まれていることから中世にも道路側溝として利用されていたと思われる。

SD4006　調査区南側で検出した東西に走る大溝である。幅広で最大 2.3m に至る。SD4005 の南側で並行しており、SD4005 に壊されていることから SD4005 より古い遺構である。東側はカクランによって壊されている。遺物に山茶碗が含まれていることから中世には埋没したと考える。

（3） 掘立柱建物

SB4013　P4021,P4025,P4027,P4031 の 4 基を検出した。北辺 2 間、東辺 1 間以上の掘立柱建物で，1 間は 1.7m、柱穴径はそれぞれ 0.78m 前後である。また、溝（SD4001 ～ 4006）に壊されていることから、これらの遺構より古いといえる。

SB4014　調査区北東隅で SD4008 とともに発見された。P4015,P4016,P4017 の 3 基を検出した。1 間 2.0m、柱穴径が約 0.32m の西辺 2 間以上の掘立柱建物である。柱穴列は調査区外へと続いていたため正確な規模は確認できなかった。SD4008 を壊しているため中世の掘立柱建物である。

（4） 墓または塚の周溝

SD4008　幅約 0.75m、深さ 0.26m の 1 辺約 3m の隅丸方形に回る溝である。第 19 次調査で同様の溝を回らせる中世墓が見つかっていることから、塚または墓と考える。SD4001 を壊していることと山茶碗が出土していることから中世以降に埋没したと思われ、同じ場所で検出された掘立柱建物に壊されている。このことから、掘立柱建物より古い遺構である。

3. まとめ

今回の調査区では、遺構は古い順に古墳、掘立柱建物 SB4013、溝（SD4001 ～ 4006）、墓または塚の周溝、掘立柱建物 SB4014 となっている。溝（SD4001 ～ 4006）はいずれも東西に平行していることから道路側溝であったと思われる。出土遺物等から古墳を壊し、掘立柱建物 SB4013 が建てられた後、あまり時間を置かずに道路側溝が掘られ道が敷設されたと考えら

れる。およそ 100 年間に目まぐるしく変化していることから、郡衙等の政治に係る整備が行われたと推察する。また、SD4001 と SD4006 から 7 世紀頃の須恵器杯と提瓶の一部が出土している。このことから、古墳周溝や古い溝の埋め立てに墳丘部の土が使用された可能性が高い。

東西に走る溝のうち、並走する溝に壊されていないものは SD4003 のみで、SD4002 は SD4001 に、SD4004 及び SD4006 は SD4005 に壊されていた。このことから、SD4001 と SD4006 は何度も繰り返し掘り直されていたために幅の広い 1 条の溝のように検出されたと考える。今回の調査では建築される住宅の基礎が浅いため地中保存が可能であったことから SD4001 と SD4006 は未完掘である。この 2 条の溝の上層部分からは山茶碗が出土していることから中世にも利用されていたと考える。

予想していた第 7 次調査区からの続き大溝と考えられるのは、SD4001 と SD4006 である。この溝 2 条は緩やかに湾曲しながら東へ向かい、第 36 次調査区で検出された SD1102,SD1103 に続いていくと推察する。このうち SD1103 は奈良時代以前のものと考えられていることから、今回確認された 2 条の溝も奈良時代以前には掘削されていたと思われる。

【参考文献】

新田剛　1995「Ⅱ．伊勢国分寺跡の調査」『三重県鈴鹿市　伊勢国分寺・国府跡－長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業概要報告書－』鈴鹿市教育委員会

藤原秀樹　1995「伊勢国分寺跡」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』鈴鹿市教育委員会

岡田雅幸　1996a「Ⅱ．1．伊勢国分寺発掘調査概要」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会

岡田雅幸　1996b「Ⅱ．2．狐塚遺跡・伊勢国分寺発掘調査概要」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会

岡田雅幸　1996c「Ⅱ．6．狐塚遺跡（河曲郡衙正倉跡）発掘調査概要」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会

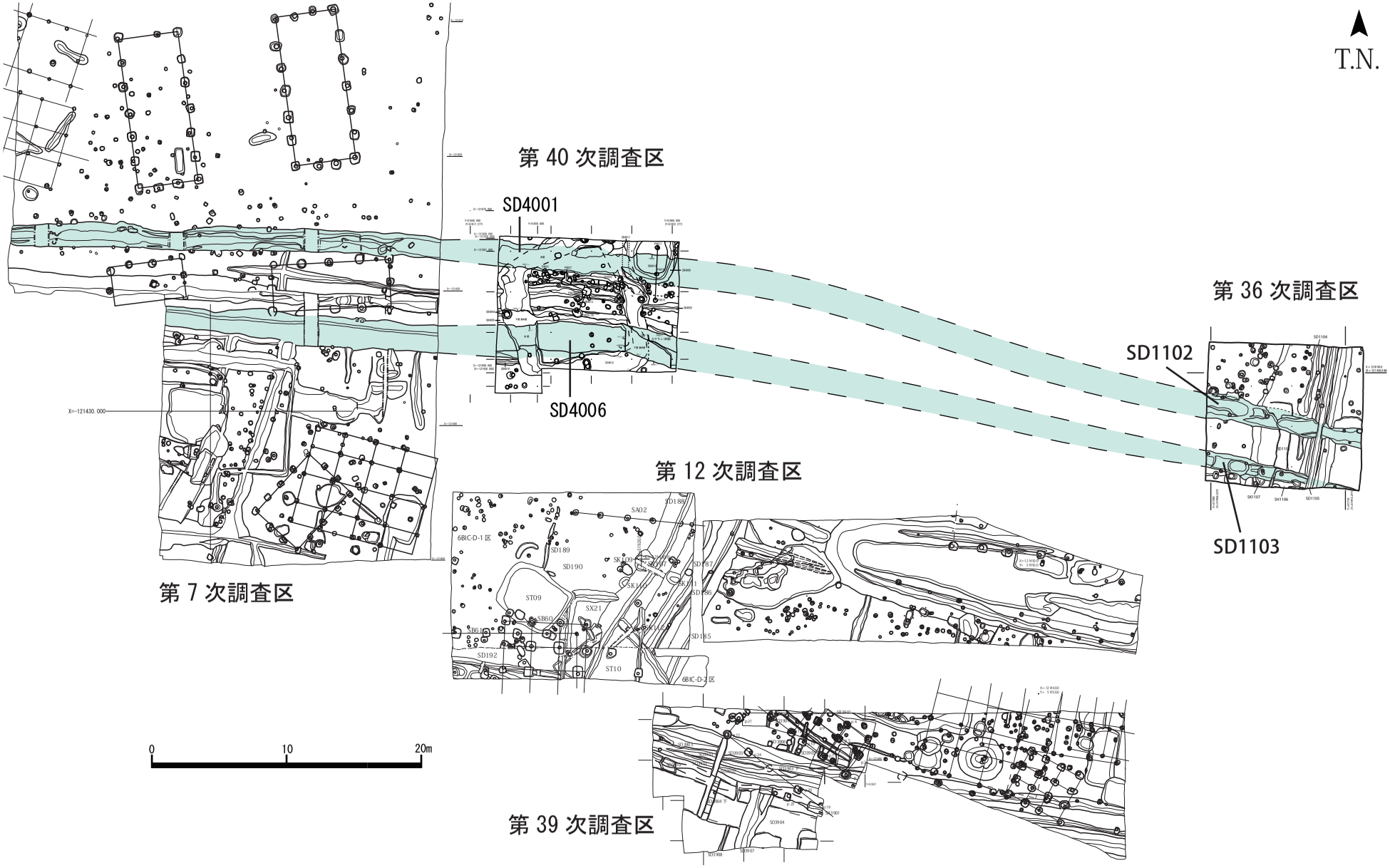

Fig.3 伊勢国分寺第 7，12，36，39，40 次調査区遺構平面図平面図 (S=1/400)